横浜医学，64，63-71（2013）

総　説

# ドセタキセル併用化学放射線同時併用療法における分子指標と予後解析

折　舘　伸　彦

横浜市立大学大学院医学研究科 頭頸部生体機能・病態医科学

**要　旨**：頭頸部癌の治療法選択に有用な予後予測因子を見いだすため遺伝子異常の研究が精力的になされてきたが，現在臨床病期以上の有用性をもって化学療法併用放射線治療後の予後予測に用いられている分子指標は存在しない．Docetaxel は細胞周期制御作用と放射線増感作用を有するため，化学療法併用放射線治療に有用な薬剤であり，北海道大学では docetaxel 併用放射線治療を行ってきた．本研究ではこの治療を受けた頭頸部癌症例を対象として癌遺伝子 cyclin D1と癌抑制遺伝子 p16および p53の発現に注目して発現と予後についての研究を進めてきた．これらの分子は細胞周期調節因子でもある．Cyclin D1陽性症例で粗生存率と無病生存率が低いこと，p16陰性症例で無病生存率が低いことを示す一方，p53発現の有無は生存率との関連が乏しいことが示された．

**Key words:**　Concurrent chemoradiotherapy; Cyclin D1; Docetaxel; Head and neck squamous cell carcinoma; p16